

NO,14

リョウブ

(リョウブ科)

リョウブは、里山の尾根筋などやや乾燥した場所にふつうに見られる落葉高木で、高さ8～10mになります。北海道南部から九州、濟州島に分布しており、幹の肌が滑らかではげやすく、木肌が赤褐色をしたサルスベリを思わせる特徴のある木肌をしています。このため、木肌だけを見てサルスベリに見間違えられることもありますが、サルスベリは中国原産の造園樹木ですので山中には自生していません。

4月中旬ごろ、リョウブが芽を開きます。枝の先端に伸び出した数センチのリョウブの芽立ちは、花を思わせるような美しさがあり、生け花の材料にも使われます。この若芽は山菜として利用され、3～4cmに伸びたものを天ぷらや味噌和えにして食されます。また、若葉を込めとともに炊き込んだものは令法飯(りょうぶめし)として戦国時代から知られています。昔は飢饉の時の非常食として利用した救荒植物としても知られ、湯がいて干したものを屋根裏に保存しておきいざというときに使いました。

島根県内ではリョウボとかフクラシバなどの地方名で呼ばれています。材は緻密で、床柱や器具材などに使われるほか、良質の木炭の原料にもなります。



▲ リョウブの花



▲ リョウブの葉



▲ リョウブの花



▲ リョウブの樹皮：すべすべしている